議会レポート

発行者　鈴鹿市議会議員 石田秀三
鈴鹿市伊船町2751　電話 371-0423
FAX 371-2469
2022.9.22　No.２５３

このフェンス早くどけて

工事の見通しも無いのに、５カ月も「立入禁止」

青少年の森公園に張り巡らされたフェンス

私は９月６日の市議会本会議で、青少年の森公園へのサッカースタジアム計画について、昨年９月から続けて５回目の一般質問の中で、末松市長の姿勢をただしました。

６月にＪリーグはサッカーチーム「鈴鹿ポイントゲッターズ」の資格を失格とする処分を決定し、チームの来季のＪ３入りは無くなり、青少年の森公園内にサッカースタジアムを急いで造る理由も無くなりました。

空文化した運営会社との協定書は白紙に戻せ

また運営会社㈱アンリミテッド・オーナー会社㈱ノーマークと鈴鹿市長が交わした協定書は、Ｊリーグの処分により空文化しています。８億円全額を借金でまかなう工事費の返済計画も、いまだに示されていません。

さらに公園用地を鈴鹿市に無料で使用許可した三重県は、民間会社ではなく「鈴鹿市に対し設置を許可した」と主張しているのに、末松市長は「市は当事者ではなく、応援しているだけ」との認識のままで、まったく食い違っています。事業に支障が出た場合は、鈴鹿市が責任を持って公園を原状回復して、県に返還する義務を課せられているのです。

私はこのように重大な問題をふくんだ協定書は白紙に戻して、今後市としてのスタジアム建設への関与は行わないことを求めました。末松市長は、９月末に運営事業者から説明・報告を受けてから考えると答えるのみでした。

また私は、事業者が本年２月に「着工」を宣言し、５月には予定地を取り囲むフェンスを張り巡らしたのは、ただ「やってる感」を出しただけで、未だに着工のメドも立っていない。すべてのフェンスを早急に撤去することを求めました。これにも市長は、一部開放を検討したいと述べるのみでした。

市長はアンリミテッドの御用聞きか？

末松市長はサッカー場問題で、私が昨年の９月議会から５回も連続して質問した問題点に、一度もまともに答えていません。また市議会に対しても、正式に説明や協議もせず、記者会見で発表した資料をその都度議員に配布しただけですし、本会議での答弁は「聞かれたから答えた」だけです。

末松市長に正面から間違いを指摘

この間のサッカー場計画の進め方は、①県から鈴鹿市がタダで公園用地５haの使用許可を受ける、②その土地を市が事業者にタダで又貸しする、③工事はすべて事業者の負担で行い、市は１円も出さない、完成後の運営も事業者が行う、という筋書です。この筋書で行けば市は議会に予算も議案も出さずに済み、用地は県の持ち物、サッカー場は民間会社の物として市はノータッチ、「ただ応援しているだけ」となる。一種の「裏ワザ」的な手法を使って、市民への説明も市民の声を聞く場も無し、でいるのです。

鈴鹿市は事業者の「連帯保証人」になったも同じ

ところがこんなウマい話のとおりには行きません。三重県が公園用地への施設設置を許可した書類には、事業者の名は無く「鈴鹿市」が責任を負って設置し管理をする事になっています。もし事業者に支障が出た場合、その責任は全部鈴鹿市にかぶってきます。公園の樹木を切り倒し地面を15mも掘り下げたものを、「原状回復」して県にお返しする責任は鈴鹿市が負うのです。また、8億円以上の事業費全額を借金でまかなう計画も、事業者が返済出来なければ責任は「又貸し」した鈴鹿市にも来るでしょう。

三重県は公文書の中で、こう述べています。「申請者である鈴鹿市は、普通地方公共団体であり、本件施設の適正な運営が可能な、十分な能力や財産的基礎を有している。」いざという時は、鈴鹿市は十分なカネを持っているから、県は何も心配していないと言っているのです。

末松市長は、サッカーチームを応援することと、スポーツビジネスとしてのスタジアム建設に肩入れすることを、混同しているのでは？と思えてなりません。私は質問の中で「あなたはアンリミテッドの御用聞きじゃない､鈴鹿市民の市長でしょう」と聞きましたが、返事はありませんでした。

税金を使っての「国葬」に反対します

白子駅前での「国葬反対」宣伝活動（９月12日）

岸田内閣が安倍晋三元首相の「国葬」を行うと閣議決定した７月14日以降、国民の中で「国葬とはおかしい」「反対」の声がわき起こっています。この声に押されて国会で岸田首相が「丁寧な説明」をしたことに対して「納得できない」の声が、かえって大きく広がり、収拾のつかない事態になっています。

岸田首相は「国葬」にする理由を、①最長の首相在任期間、②経済・外交の実績、③外国からの弔意表明、④選挙中の死、などを繰り返すばかりで、どのメディアの世論調査でも「反対」が「賛成」を上回り増え続けています。私の記憶でも、1980年の衆参同時選挙の最中に、時の大平正芳首相が急死した際には「自民党・政府合同葬」で行われています。ムリに国葬にする必要も根拠もないのです。また、安倍氏殺害を契機に吹き出した「旧統一協会と安倍氏・自民党との関わり」も、まったく明らかにされていません。こんな状況の下で国葬を強行しても、日本の恥を世界にさらすだけです。16億円以上もの税金を使っての、27日の国葬は絶対に中止すべきです。

夏山に登りました

八ヶ岳連峰・天狗岳をバックに

今年の猛暑には参りましたが、こんな時こそ体力づくりと、７月下旬から８月上旬にかけて夏山に挑戦しました。地元では御在所岳、国見岳、経ヶ峰、信州・北八ヶ岳の北横岳、天狗岳。どこも好天に恵まれて、いい景色と下界より涼しい風を楽しめました。秋には鈴鹿の山や、近くの紅葉を訪ねて歩きたいです。

今年もコメが豊作！

１反の田んぼでコメを毎年作っていますが、今年は９俵半の上出来でした。雨がよく降って、イネより伸び蔓（はびこ）延る畦草との戦いに明け暮れましたが、終わり良ければ全て良し。

ずいそう

さかなクンとお母さん

テレビでおなじみの「さかなクン」が映画になり、ただいま上映中です。その映画の原作になった本「さかなクンの一魚一会（いちぎょいちえ）」（講談社青い鳥文庫）がまた、映画よりも面白いのです。しかもフィクションではなく、さかなクンが生まれてからこれまでの半生を自らリアルに語った文章が、面白くて一気に読んでしまいました。

この子は魚が好きで、絵を描くことが好きなんです！それでいいんです！

中でもお母さんの子育てへの態度に、感心させられました。幼稚園の頃は魚ではなく自動車、特にゴミ収集車に興味を持ったマー君（本名）を、ある日ゴミ収集車がズラリと並んだ車庫に連れて行ってくれたのです。小学校に入ると、突然タコが好きになったマー君を、お母さんは魚屋に連れていって、毎日タコ料理を作り、生きたタコを見たいと言えば水族館に連れて行き、１日中タコの水槽の前から動かないマー君に付き合ったのです。

次第にタコ以外の魚も見るようになったマー君、魚の絵を描くことに夢中になりますが、学校の成績は下がる一方。担任の先生から学校の勉強もやるようにと迫られても、お母さんはいつも「この子は魚が好きで、絵を描くことが大好きなんです！だからそれでいいんです！」と言ってくれました。

子どもを信じ切る。この母にして、この子あり

「母の態度は一貫していました。先生に語ったこの言葉どおり、『勉強しなさい』とか『お魚のことは、これくらいにしときなさい』などと言ったことは、一切ありませんでした。そのかわり『お魚が大好きなんだから、好きなだけ絵を描くといいよ』と、いつも背中を押してくれたのでした。」

成績がダメで､憧れの東京水産大学に落ちたさかなクン、2006年に何と！この大学の客員助教授に、2015年には名誉博士となったのです。アッパレ！